

「さすが」の連体修飾用法のモデル化について

周^{しゅう}世超^{せいちょう}（重慶大学）

1 はじめに

副詞の「さすが」には、「さすがの～」という連体修飾用法がある。これまでの研究では、「さすがの田中も疲れた」という「期待されている主体が評判通りにならない」様子を表すという「さすがの」の用法¹⁾に関する記述しかないようである。しかし、「さすが」の連体修飾用法にはこの用法しかないとは考えにくい。実際の用例には、「さすがの老舗」、「さすがの腕前だ」というような連体修飾用法も見られる。そこで、本稿では、統語論と意味論の観点から、「さすが」の連体修飾用法²⁾に焦点を合わせ、そのモデル化を試みる。

2 先行研究の問題点と本稿の立場

「さすが」に関する研究は渡辺(1997)、周(2017)、周(2019)などが挙げられる。渡辺(1997:pp3-9)は、現代語として「さすが」の意味・用法を、(一)「A はさすがに a だ」タイプ、(二)「A も B にはさすがに ā(b)だ」タイプ、(三)「さすがの A も B には ā(b)だ」タイプ³⁾の三つがあると述べている。「さすがの」という「さすが」の連体修飾用法はタイプ(三)の「さすがの A も B には ā(b)だ」に当てはまると思われる。

また、発表者も周(2017)、周(2019)において「さすが」の意味・用法について検討した。周(2019)は、「さすが」と「さすがに」の役割分担に関する考察であり、「さすが」の連体修飾用法については言及しなかった。一方、周(2017:pp37-38)においては、「さすがの」を「さすが」が主語を修飾する場合に分類した。確かに、「さすがの田中さんも疲れた」のような場合、渡辺(1997)でいうタイプ(三)にあてはまり、「さすがの」は主語の「田中さん」を修飾していると考えられる。しかし、実際の用例を観察したところ、すべての「さすがの」が、タイプ(三)に属し、主語を修飾しているというわけではない。

- (1)壁が次々と倒れていき、いよいよ上級を仕留める機会がやってきた。だがさすがの武芸者である。敵は俊敏に木に隠れ、弓で応戦してきた。(山田悠介『8.1 Game Land』2007)
- (2)すっかり火がついた空間をさらに燃えあがらせたのは THE BAWDIES。(中略)誰しもを巻き込むパワーで満場のジャンプ&コールを巻き起こし、心も体も踊らせるさすがのパフォーマンスだった。(『朝日新聞デジタル』2019年4月19日)
- (3)当時、他の諸将軍が、洛陽の離散から長安の大乱と果てなき兵燹乱麻のなかに、ただおたがいの攻伐にばかり日を暮し合っていた際に——ひとりそこへ着眼した

1) この解釈は『広辞苑第七版』に基づき、まとめたものである。

2) 本稿では、「さすが先生」というような用例について、連体修飾として機能しているのか、それとも連用修飾として機能しているのかについて判断しきれない部分があるため、また別の機会で論じることとする。

3) A にはある素質・力量のようなものが認められており、a はその素質なり力量なりの具体的な発現と見なされているものである。a は A の備わりの極めて自然な発現として、順当という評価を受けている。B と b は、A と a と同じ関係を示すものである。

若き荀文若——荀の達見はさすがのものであった。(吉川英治『三国志(三)』1989)

例(1)(2)(3)における「さすがの」は「さすが」の連体修飾用法として機能しているにもかかわらず、主語を修飾しているわけでもなければ、タイプ(三)に属しているとも言い難い。なぜならば、例(1)(2)(3)には、タイプ(三)の「A の力量の当然の帰結として期待される a が実現しない」という意味が含まれていないからである。このことから、渡辺(1997)、周(2017)にまとめられている「さすが」の連体修飾用法は不十分と言わざるを得ない。例(1)(2)(3)のような「さすが」の連体修飾用法も視野に入れるべきである。

さらに、「さすが」の連体修飾用法として、次の例(4)(5)のような言語現象も見逃してはならない。

(4)a. どうしてこういう発想ができるんだろう。さすがの七十歳。(糸井重里『糸井重里の萬流コピー塾』1988)

b. どうしてこういう発想ができるんだろう。さすが七十歳。

(5)a. この中には馬にかけては中央一を自負するロア衆がいる。さすがの働きだった。(茅田砂胡『デルフィニア戦記 第03巻』1994)

b. *さすが働きだった。⁴⁾

例(4a)(5a)の「さすがの」は名詞述語を修飾しているにもかかわらず、例(4a)の「さすがの」は例(4b)のように「さすが」に置き換えていても差し支えないのに対し、例(5a)の「さすがの」を例(5b)のように「さすが」に置き換えると不自然な表現になる。なぜこのような現象が生じているのかという問題についてまだ明らかにされていない。

以上の言語事実が示すように、「さすがの」という「さすが」の連体修飾用法の全容がまだ十分に明らかにされていないといえる。そこで、本稿では、渡辺(1997)に基づき、「さすが」の連体修飾用法のモデル化を試みる。用例を観察してみると、「さすが」の連体修飾用法はおおよそ次の(6)の三つのタイプにまとめられるのではないかとと思われる。

(6)タイプ(I)「さすがの A も(さえ・でも・だって)B には $\bar{a}(b)$ だ」

タイプ(II)「さすがの A だ、a だ」

タイプ(III)「さすがの a だ」⁵⁾

上記の(6)は本稿で新たに提案した「さすが」の連体修飾用法のモデルである。タイプ(I)は渡辺(1997)にまとめられているタイプ(三)に基づいたものである。タイプ(II)とタイプ(III)は、例(4)(5)を区別するために、新たに提案したものである。

3 「さすが」の連体修飾用法のモデル化

本章では、前章で提案した(6)の三つのタイプの特徴について述べる。(6)の妥当性について実証する。

3.1 タイプ(I)の意味特徴

4) 本稿において、不自然な表現に「*」を付ける。

5) 本稿で提案した「さすが」の連体修飾用法にあるアルファベットの A, a, B, b は渡辺(1997)から借りた言葉であり、具体的な意味は注 2 をご参照ください。

まず、仮説(6)のタイプ(I)の「さすがの A も(さえ・でも・だって)B には $\bar{a}(b)$ だ」という従来の「さすが」の連体修飾用法について考察する。

(7)さすがの坂部先生も、この深い疲労には耐え難かった。(三浦綾子『銃口』1994)

例(7)は「さすがの A も(さえ・でも・だって)B には $\bar{a}(b)$ だ」タイプとして認められる。文脈から読めば、主体の「坂部先生」(A)には「普段あまり疲れている顔を見せない」(a)という「当然の帰結」がある。本来であれば(この状況でなければ)、「さすが坂部先生、疲れていない」というように、「坂部先生」(A)は「疲れていない」(a)という「当然の帰結」が実現されるだろう。しかし、「この状況」(B)にもまた「人を疲れさせる」(b)という「当然の帰結」がある。「耐え難かった」という結果はつまり「坂部先生」(A)にとっての「当然の帰結」の「疲れていない」(a)という結果が実現できず、「疲れた」という $\bar{a}(b)$ の結果になったことである。これが従来の「さすが」の連体修飾用法である。

また、コーパス⁶⁾を調べた結果、「さすがの」は「も」という助詞と意味関係を結ぶ場合以外に、「さえ」「でも」「だって」などのような助詞と意味・関係を結ぶ場合もある。下記の例(8)(9)(10)に示すように、これらの場合において「期待されている主体が評判通りにならない」という意味を表しているところは共通していると思われる。

(8)その結果、さすがの粒揃いの名手からなるNBC交響楽団でさえ、トリオのふしが完全に歌いきれてないという印象を与えるほどである。(吉田秀和『世界の指揮者』1982)

(9)私の方はアーサーの何十倍もの運動量をこなし、同時に下半身の神経を常に尖らせていなければなりません。さすがの私でももう限界を超えております。(酒見賢一『語り手の事情』1997)

(10)こう毎回毎回、あちこち壊されて帰ってくると、さすがの俺だって、文句の一つも言いたくなる。(賀東招二『フルメタル・パニック！サイドアームズ 01』2004)

例(8)(9)(10)において、「さすがの」は主語を修飾し、そのあとに「さえ」「でも」「だって」が後続している。この場合、従来の「さすが」の連体修飾用法と同じように、期待されている主体の「NBC交響楽団」「私」「俺」(A)は、評判通りのようにならない(\bar{a})という結果になる。

このことから、「さすがの」が主語を修飾する場合、「さえ」「でも」「だって」と意味関係を結ぶことが可能であるといえる。いずれも従来の従来の「さすが」の連体修飾用法の表す意味と変わらないため、同じくタイプ(I)「さすがの A も B には $\bar{a}(b)$ だ」に相応しいものとして認められる。

3.2 タイプ(II)の意味特徴

本節では、タイプ(II)の「さすがの A だ、a だ」の意味特徴について考察する。次の例(11)(12)(13)はタイプ(II)として考えられる。

(11)どうしてこういう発想ができるんだろう。さすがの七十歳。(例(4)を再掲)

6) 本稿でいう「コーパス」は、朝日新聞デジタル(www.asahi.com)、グーグルブックス(books.google.co.jp)などから抽出した「さすがの」の用例計 4138 例を研究の対象とする。

(12)名刺交換の所作の美しさはさすがの営業さん。(『朝日新聞デジタル』2017年9月28日)

(13)さすがの老舗、ツアーの数が多い。(『朝日新聞デジタル』2018年11月22日)

例(11)(12)(13)の「さすがの」は「七十歳」「営業さん」「老舗」という名詞を修飾し、「さすが」の連体修飾用法として認められる。被修飾語の「七十歳」、「営業さん」、「老舗」はある素質や力量の持ち主のAだと考えられる。例(21)の場合、「七十歳」(A)は「こういう発想ができた」という順当の結果(a)を得られた。例(22)の場合、「営業さん」(A)は「名刺交換の所作が美しい」という順当の結果(a)を得られた。例(23)の場合、「老舗」(A)だから「ツアーの数が多い」という順当の結果(a)になる。

本発表では、例(11)(12)(13)のような「さすが」の連体修飾用法をタイプ(Ⅱ)の「さすがのAだ、aだ」として位置づける。

3.3 タイプ(Ⅲ)の意味特徴

本発表で提案したタイプ(Ⅲ)の「さすがのaだ」の例として、下記の例(14)(15)(16)が挙げられる。

(14)この中には馬にかけては中央一を自負するロア衆がいる。さすがの働きだった。
(例(5)を再掲)

(15)学級担任の小倉布美子教諭(37)は「クラスで見せる穏やかな顔とは違う真剣な目つき。主将としてさすがの一振りですね」と目を細めた。(『朝日新聞』2019年8月21日)

(16)すっかり火がついた空間をさらに燃えあがらせたのはTHE BAWDIES。(中略)誰しもを巻き込むパワーで満場のジャンプ&コールを巻き起こし、心も体も踊らせるさすがのパフォーマンスだった。(例(2)を再掲)

例(14)(15)(16)における「さすがの」は「働き」「一振り」「パフォーマンス」という名詞を修飾している。例(14)の場合、全文の「ロア衆」がある素質や力量の持ち主のAであり、「ロア衆」の「順当の帰結」として「素晴らしい働きをしてくれた」というのが「順当の結果」(a)である。例(15)の場合、「主将」(A)だから、「素晴らしい一振り」(a)を見せてくれた。例(16)の場合も、「THE BAWDIES」(A)だから、心も体も踊らせるパフォーマンス(a)を見せたのである。この場合、「さすがの」は「『さすが』と言えるほどの」という評価の意味を表している。この場合、「さすが」の被修飾語の「働き」「一振り」「パフォーマンス」は「ある主体の順当の結果(能力)」(a)であると認められる。

本発表では、上記の例(14)(15)(16)のような「さすが」の連体修飾用法をタイプ(Ⅲ)の「さすがのaだ」として位置づける。

4 「さすが」の連体修飾用法の三つのタイプの相違点

本章では、本発表で提案した三つのタイプの相違点について述べる。まず、本発表で提案したタイプ(Ⅱ)とタイプ(Ⅲ)は、従来のタイプ(Ⅰ)とどのように異なっているのかについて考察する。

(17) さすがの坂部先生も、この深い疲労には耐え難かった。(三浦綾子『銃口』1994)

(18) さすがの老舗、ツアーの数が多い。(『朝日新聞デジタル』2018年11月22日)

(19) 学級担任の小倉布美子教諭(37)は「クラスで見せる穏やかな顔とは違う真剣な目つき。主将としてさすがの一振りですね」と目を細めた。(『朝日新聞』2019年8月21日)

例(17)は従来のタイプ(I)に、例(18)は本発表で提案したタイプ(II)に、例(19)は本発表で提案したタイプ(III)に当てはまる。タイプ(II)とタイプ(III)の例(18)(19)は、いずれも期待されている主体のAはその当然の帰結のaは実現されている。例(18)の場合、「老舗(A)だから、ツアーの数が多い(a)」という意味を表し、例(19)の場合、「主将(A)だから、素晴らしい一振りを見せてくれた(a)」という意味を表している。一方、従来のタイプ(I)に分類される例(17)には「期待されている主体(坂部先生A)が評判通りにならない(疲れたā)」という意味を表しているため、タイプ(II)タイプ(III)は、従来のタイプ(I)と異なるものであると認めなければならない。

つまり、主体の当然の帰結aが実現したかどうかは本章で提案したタイプ(II)タイプ(III)は、従来のタイプ(I)との違いである。いわば、タイプ(II)とタイプ(III)は主体の当然の帰結aが実現しているのに対して、タイプ(I)の主体の当然の帰結aが実現していないのである。

次に、タイプ(II)とタイプ(III)の相違点について述べる。まず、「さすがの」は「さすが」に置き換えることが可能かどうかであるは、その相違点の一つとして挙げられる。

(20)a. どうしてこういう発想ができるんだろう。さすがの七十歳。(例(4)を再掲)

b. どうしてこういう発想ができるんだろう。さすが七十歳。

(21)a. この中には馬にかけては中央一を自負するロア衆がいる。さすがの働きだった。(例(5)を再掲)

b. *さすが働きだった。

例(20a)はタイプ(II)の「さすがのAだ、aだ」にあてはまり、例(21a)はタイプ(III)の「さすがのaだ」として認められる。例(20a)の「さすがの」は例(20b)のように「さすが」に置き換えていても差し支えないのに対し、例(21a)の「さすがの」を例(21b)のように「さすが」に置き換えると不自然な表現になる。

このことは、「さすが」の用法に関係していると思われる。「さすが」は「さすが田中さん」という直接名詞を修飾し、その名詞の指し示す主体に対して話者の評価を与える使い方があり、被修飾語は評価の対象であるため、その主体を指し示す機能ができる名詞が立つ必要がある。例(20)の「さすがの」の被修飾語の「七十歳」は、主体を特定できる役割を果たしているため、「さすがの」を「さすが」に置き換えていても差し支えないのである。一方、例(21)の「さすがの」の被修飾語の「働き」は、ある主体の「当然の良い結果」として認められる。しかし、結果だけでは、その主体を特定できない。そのため、タイプ(III)の例(21)の「さすがの」を「さすが」に置き換えることができないのである。

つまり、タイプ(II)の「さすがのAだ、aだ」とタイプ(III)の「さすがのaだ」の一番

大きな違いは、被修飾語は主体であるか、それともその主体の当然の良い結果であるかにある。

次に、タイプ(Ⅱ)とタイプ(Ⅲ)の意味特徴の違いについて、タイプ(Ⅲ)の「さすがの」は「素晴らしい」や「最高の」などの意味が前景に立っているのに対して、タイプ(Ⅱ)の「さすがの」は「その結果を成し遂げたのは、その素質を持つ主体である」という因果関係が前景になる。

(22) どうしてこういう発想ができるんだろう。さすがの七十歳。(例(4)を再掲)

(23) この中には馬にかけては中央一を自負するロア衆がいる。さすがの働きだった。

(例(5)を再掲)

例(22)の「さすがの」は主にその結果を成し遂げたのは、その素質を持っている人物であるからだという因果関係が前景になる。例(23)の場合、「さすがの働き」はまず素晴らしい働き、または最高の働きでなければならない。その背後に、その働きを実現したのは「ロア衆」だからであるという意味が含まれている。

以上が本発表で提案した「さすが」の連体修飾用法の三つのモデルの相違点であり、この三つモデルがそれぞれ違うものとして認められる証左にもなりうる。

5 まとめ

本稿では、「さすがの」という「さすが」の連体修飾用法に焦点を合わせ、(8)の仮説の妥当性について考察してきた。その意味・用法について、タイプ(Ⅰ)「さすがの A も(さえ・でも・だって)B には $\bar{a}(b)$ だ」、タイプ(Ⅱ)「さすがの A だ、a だ」、タイプ(Ⅲ)「さすがの a だ」という三つにまとめることができました。タイプ(Ⅰ)は先行研究に基づき、「さすがの」が主語を修飾する場合、「も」以外にも「さえ」「ても」「だって」と意味関係を結ぶことができることを判明した。タイプ(Ⅱ)とタイプ(Ⅲ)は本稿で新たに提案したものであり、「さすが」で置き換えることが可能かどうかという基準で、「主体」を修飾している「さすがの」をタイプ(Ⅱ)として位置づけ、「当然の良い結果」を修飾している「さすがの」をタイプ(Ⅲ)として位置づけることができた。

参考文献

周世超(2017)『『さすが』の意味・機能に関する考察』『鹿児島国際大学大学院学術論集』9、pp.33-42、鹿児島国際大学大学院。

周世超(2019)『『さすが』と『さすがに』の役割分担について』『日本語文法』19-2、pp.83-99、日本語文法学会。

新村出(編)(2018)『広辞苑 第7版』岩波書店。

渡辺実(1997)「難語「さすが」の共時態と通時態」『上智大学国文学科紀要』14、pp.3-30、上智大学国文学科。

渡辺実(2002)『国語意味論』塙書房。

参考資料

〈新聞サイト〉『朝日新聞デジタル』2007-2019(<http://www.asahi.com/>)

〈コーパス〉現代日本語書き言葉均衡コーパス(<http://nlb.ninjal.ac.jp/>)

〈検索エンジン〉Google ブックス(書籍検索)1970-2017(<http://books.google.co.jp/>)